

アメリカ文学覚え書き(1)

松田卓

小説をいかに読むか。特にここでは、アメリカの小説をいかに読むかということについて常識的に、少し大袈裟に言えば、啓蒙的にのべてみたい。

小説をいかに読むかと、ある意味で、構えた言い方というのは愚しいことというべきかも知れない。何故なら、小説は、読者の徳育を図ろうとか、読者を啓蒙しようとかといった狙いを大上段に振りかぶっているわけではなく、もしそういう小説があったとすれば、それは、まさに三文文士 (hack writer) の三文小説 (hack work) 以下で、もう、それは小説とは言えない。小説にとって、小説が特定の目的・意図を正面に掲げるということは小説自体の自殺行為を意味している。

小説は、どう読もうが、読者の勝手というもので、十人十色の読み方があって当然である。しかし「文学の研究法」というような学校の授業科目があったり、「小説の読み方」とかという書物がいくらでもあるところをみると、「小説をいかに読むか」ということにも何らかの 'raison d'être' はあるのかも知れない。

断わっておかねばならないが、「小説の読み方」はいかに客観的にのべようとしても、絶体とっていいほど主観的になってしまう。それはどうにもただしようのないことで、客観的であろうとする態度自体が、大きな矛盾である。むしろ、客観的であろうとすればするほど、なお更、主観に縛られてしまうといった無限地獄に陥いる。ある一つの現象が一人の人間の目を通して語られる時、その内容が、その人間のものの見方、考え方に潤色されるのは止むを得ない。「文学」そのものも又、そういった性質のものである。

「文学の読み方」ということは、「文学の在り方」自体と同様に、ある一人の人間と「文学」がどう関わり合ったかということに深い関係がある。例えば、

ある人が芥川龍之介から文学の世界に入ったか、ゲーテから文学の世界に入ったかで、その人の文学観——人生観、世界観——，もっと、平易な言い方では、ものの見方なり、人生との関わり方なりが違って来る。ゲーテから入った人はゲーテ的なものの見方や宇宙観をもつことになり、芥川龍之介を好む人は、芥川の生き方なり、人生観なりに共鳴しているのである。芥川に「宇宙観」という表現は似つかわしくない。

もちろん、誰から入ろうと、その後、変化するということもあるし、又、その人の好みも、誰から文学の世界に入るかということも決定するであろう。そして、芥川から入った人の文学の道には、その人の好みに合った作家が登場してくることになるということも否定出来ない。芥川龍之介と Byron とも、又 Oscar Wilde も、どこかで、つながっているであろうし、或いは Hemingway とでも、Byron はつながっている。A Farewell to Arms 「武器よさらば」で Henry 中尉は Catherine をスイスの病院でなくして、雨の中を病院から出てくる時、⁽¹⁾「あれも又、わなだったのだ」と言っている。Byron は Cain の中で、神は Adam と Eve をわなにかけた、と言った。Hemingway を読んだ人はカミュ (Albert Camus) も恐らく好むであろう。このように、共通点の多い作家はいくらでもいる。

しかし又、それらの作家に共通点を見出すのも、受け取るのも、極めて主観的なのである。

アメリカの文学に先づ目をむけてみよう。アメリカの文学を、と言っても、すべての作家をとりあげようと言うのではない。アメリカの建国以来の歴史は浅い。しかし、文学が、真にアメリカを語るようになってからの歴史は短くとも、その果して来た役割は、どの国の文学にも劣らない。それらは、只、単に、アメリカを語っているのではない。世界のすべてを語り、人類そのものに目を向けていると言ってもよい。

アメリカの小説ほど、アメリカという国の成り立ちや風土と深く結びついていないものはないように思われる。周知の通り、アメリカの建国は 1620 年、12 月 16 日、The Mayflower に 102 人の Pilgrim Fathers が Massachusettes の

Plymouth に上陸した時に始まる。彼らは長老牧師 William Brewster, William Bradford を先頭に、The Mayflower Compact 「メイフラワー契約」という彼らの政治の理想を契約書に認めて、船を降りた。彼らはこれによって、神の国をこのアメリカの地に建設しようとしたのである。アメリカこそ、まさに、Bible Nations にとって「神の約束の地」であった。それは又、Another Eden でもあったし、Paradise Regained 「回復された楽園」となるはずのものであった。アメリカは「楽園」を求めて来た特定の人たちのためだけの「楽園」というのではなかった。恐らく誰もその辿るべき運命に気づいていなかったが、アメリカは、地球上に生存するすべての生きものにとっての「楽園」であり、「夢の国」であったのである。ここで、人間は「楽園」を回復出来なかったならば、地上では、もう「楽園」は回復出来ない、いわば運命の岐路であった。のちに、Hemingway は Green Hills of Africa で、^②「機械は再生産することは出来ない。土地を肥すことも出来ないし、人間の作ることを出来ないものを食ってしまう。又アメリカはかつてはよい国であったがぼくらがそれをだいなしにした。」と嘆いた。

ここで、よく、我々はアメリカの「創生期」の意味をよく考えてみなければならぬ。アメリカに渡って来た Pilgrims は Calvin の思想を一応、その宗教信条としていた。カルヴィン主義は、決定論 (Determinism) をその特色としている。「選民の思想」である。彼、カルヴィンによれば、救われるものと救われざるものは神によって決定されているというのである。遠い、人間の祖先である Adam と Eve によって犯された過ちによって、その子孫である我々人間は、救われぬというのである。そのためにバイロンによれば、^③「アダムとイヴは、悪の種と同時に人間の種を蒔いた人であり、人間はその人の思い出を愛することはなく、彼らは知識と罪の木をつみとって、未来永劫に続く悲しみをうんだ人」である。

もっとも、この Puritans の信仰も、アメリカの風土の中で、かなり、時と共に、楽天的になり、妙な錯角にとらわれて、アメリカの神話をうむことになる。Benjamin Franklin や Ralph Waldo Emerson らによって、アメリカには、

Pragmatism の哲学が、育つことになる。

今少し、アメリカの創成期について、考えてみよう。アメリカはその歴史は、今上にのべたように、人類にとって、エデンの再来の夢の跡づけであった。そして、他の国と異って、その第一歩から克明にウイリアム・ブラッドフォードによって、書き綴られ、神話の時代が欠落している。しかし、「神話」はないにせよ、アメリカに賭けた Bible Nations, バイブル国民たちの夢をアメリカは背負っており、そして、そのアメリカという国の成立は、きわめて象徴的に「創成期」そのものであったのである。そして、Calvinism によって、裏うちされた清教徒主義も、その主義そのものの「選民思想」が、内部矛盾、内部崩壊を惹き起す運命をはらんでいた。ウイリアム・ブルースターやウイリアム・ブラッドフォードら Plymouth の Puritans, Plymouth と、1630 年に John Winthrop に率いられてマサチューセッツにやって来た Puritans と区別するために、前者を Pilgrims ということにする。— いずれも Puritans であることに変わりはない。— ブラッドフォードの Pilgrims たちは、先にのべた The Mayflow Compact にのっとって、個人的自覚を尊重し、自由と平等を唱え、民主主義的な Separatists (分離派) であった。然しながら、ジョン・ウインスロップたちの Puritans は、きわめて保守的で、身分制度を厳守し、神の主権に対する絶体主義であった。ウインスロップは、その政治を絶体的神権政治としたのであった。彼は、民主政治は、政治の最も卑しむべき、最悪の政治形態であると考えた。ウインスロップとブラッドフォードとは、身分的にも雲泥の差があった。以下の人々も、すべて、異っていた。そして、先にふれた通り、「決定論」と、「選民の思想」が、排他的、独善的思想に陥ちいり、遂に内部分裂をもたらした。

思想・信教の自由、寛容の精神こそ、清教徒主義の精神であると、Thomas Hooker や、Roger Williams が離反した。フッカーは Hartford の町を建て、ロージャー・ウイリアムズは Providence の町を Rhode Island に開いた。ウインスロップたちは Charles 1 世の圧迫に抗し切れず、1630 年にマサチューセッツのボストンに移住したのであった。Harvard 大学は 1636 年に出来た。

そして十八世紀の初めには、ヨーロッパの啓蒙主義がアメリカの清教徒主義の神権政治を根もとから崩すことになったのであった。イギリスの Isaac Newton, John Locke たちの科学や、哲学、更にフランスの Voltaire がベンジャミン・フランクリン、Thomas Jefferson らを通じて、アメリカの Renaissance をもたらした。そして、Puritanism の腐敗、墮落を救わんとした Jonathan Edwards の運動 (The Great Awakening) も、滅びゆくものを救うことは出来なかった。

マサチューセッツの清教徒たちの神権政治 (Theocracy) が崩壊しても、清教徒主義が消え去ったわけではない。決定的になるのは 19 世紀から 20 世紀の資本主義経済の隆盛と、目覚しい産業技術や、(technology) Marxism が手を伸ばした時であった。

又、アメリカが、その神権政治は崩壊したとはいえ、人類の夢を失ったわけではなかった。彼らのエデンは、時の経過とともに、様々に姿を変えつつも、依然として、彼らには、Eden であり Canaan の地であった。イスラエルの民が容易に Canaan に入れず、Moses と共に 40 年アラビアの砂漠を放浪したのによく似ている。しかし、Moses の Canaan の将来は、象徴的に我々の現代が示している。

Henry David Thoreau の Walden は、ソローだけのものであり、エマーソンの自然は、既にソローの自然ではない。師であったエマーソンの自然はかなり妥協の、機械文明との妥協の自然であり、効用価値の色彩にいろどられた自然になっている。エマーソンが、Margaret Fuller や A. Bronson Alcott らと始めた Brook Farm も自然に消滅した。或いはアメリカのエデンは、バイロンのカインが、アダムとイヴに追放されて、エデンの東へ道をとった時、振り返ってみた、⁽⁴⁾「ケルビムの火の門で囲われたエデン」であったのかも知れない。

このように、アメリカには、その下地として、マルコポーロ (Marco Polo) や、アメリーゴ (Amerigo Vespucci)、コロンブス、スミス船長などのアメリカがあった。更に、レイフ・エリックソンの発見した、あるいは、北欧のサー

が出てくる、ヴィンランド (Wineland) があつた。それらは、いずれもエデン、又は、カナンの土地のイメージである。古くは、ギリシアのプラトンのポリティアがあり、イギリスでは Thomas More も理想郷、ユートピアを書いて、聖書国民の夢をはぐくんだ。そして、その夢をますます大きくしたのは、近代科学である。人間は、エデンの再発見を近代科学の力を借りてなし遂げた。ここに大きな皮肉がある。エマーソンは、ソローのことをその「歴史的覚え書き」で次のように言っている。⁵「われわれはまちがった戸を開けて敵を城内に入れてしまった——文明はまちがいであつた。」前・後は省いたが、これがソローの説であつた。エマーソンは、彼の自然論である「自然」Nature や、「アメリカの学者」The American Scholar において、アメリカ人のヨーロッパ的なもの、古いものからの脱却を説いた。彼は言う。⁶「われわれも何故宇宙に対して独自の関係を持たないのか。伝来のものでなく直感の詩と哲学を持ち、祖先の宗教・歴史ではなく、われわれに啓示された宗教を持たないのか」と。アメリカの精神的独立を主張し、同時に、自然は人間のためにあるのだと言う。Emerson の「自然論」は、多分に現代的な効用価値の色彩を帯びているとは先にふれたが、もっと注意しなければならないのは、その前のアメリカの精神的独立を主張している部分である。ここは読みようによっては、アメリカのエデンは独自のものであるという主張に受けとれることである。彼はここで清教徒主義自体からも決別している。彼はそのラディカルな宗教観の故にボストンの教会から追放されている。彼の「神学部講演」においても、彼らしい人間讃歌を謳った。「Jesus Christ は人間である」と言って、ハーバード大学の、こちこちの神学部の教授たちの眉をひそめさせもした。

エマーソンのこの考え方は、もちろん政治的には、アメリカの独立であつたし、Jeffersonian Democracy とつながり、フランクリンの The Way to Wealth 「富への道」ともつながる。同時に、無垢なるアメリカのもうひとつのエデンとなり、アメリカのアダムとイヴは、昔の「創生期」のアダムとイヴではないことになる。ここに、アメリカの神話が、はっきり姿を現わすのである。

不思議なことに、というよりはむしろ当然の帰結と言うべきかも知れない

が、このエマーソンらの考え方は、北アメリカのいわゆる Yankeeism となり、産業主義となる。マサチューセッツのボストンそれ自体が、何時しか産業主義、近代文明のアメリカ的発生の地となった。エデンへの道、少なくとも、カナンへの道の始まりとしてのボストンは、近代産業文明への道標となったのである。もちろん、それは象徴的な意味ではある。むしろフランクリンの Philadelphiaこそが、近代産業の合理主義の砦であった。しかし、プリマス、ボストンはかつての建国の砦であり、エデンへの入り口であったことを思えば、大いなる皮肉といわざるを得ない。

Nathaniel Hawthorne も、Brook Farm で、エマーソンの仲間であった。エマーソンもホーソンのことを悪くは言っていない。しかし、二人は、所詮、袂を分つ運命にあった。ホーソンをカルヴィンはしっかりと縛りつけていた。しかし、エマーソンは切りはなして自由の身となった。Pandora の函を開けるのをエマーソンは手伝ったことになる。ホーソンは、少し「函」にさわっただけで、怖じけづいてしまった。彼の、Salem の魔女を殺した先祖のことが彼を捉えて離さず、彼の先祖は、「原罪」の証人でもあったのである。

実に、マサチューセッツのボストンはアメリカの国を動かしてゆく二大対立概念をこの「創生期」に育てていたのであった。エデンが意味する自然、ソローの言う文明を入れてはならない自然と、もうひとつのエデンを営むのに便利であった文明である。やがて、これは、南部との対立をうみ出すことにもなる。そして、ソローは東と西という表現で、東をヨーロッパと考え、大西洋は⁽⁷⁾「忘れ川」という。ここまでは、エマーソンも同じである。この考え方は政治では Monroe Doctrine となる。又、アメリカの政治の基本理念は、あくまでも奇妙なことに (?) 重農政策であった。これは第一次大戦まで続く。僅か半年の参戦で、第一次大戦を Wilson 大統領のいう「勝利なき終結」に導くほどの近代戦力を蓄えていた工業国家に成長したアメリカにも拘らずである。

南部と北部の対立ということは、これも運命の大きな皮肉である。南部には自然があり、とは言っても、エデンという概念、範疇に入らないにしても、少なくとも南部では、自然が生活の基盤であった。エデンへの道標であった「北」

は全く自然とはほど遠い文明の異名となった。もっとも、アメリカをエデンに喩えるとき、北を指しているわけではなく、南・北という区分は全くない。

いずれにせよ、エデンのイメージは著しく損われた。エデンではないにせよ、近代産業の波が、「西進運動」と相乗作用を起して自然そのものが失われてゆく。機械がエデンに導入されると当然、エデンは変貌する。かつての、エデンはもはや存在しない。楽園は機械にそぐわないとするソローたちの時代はもはや過去のものとなった。

しかし、それでも、まだ、現代とは隔絶の感がある。人々は、破壊されたものと思わず自然派を標榜する。自然は又、自由の別名でもあった。たしかに旧世界のヨーロッパでは、当時、まだ君主政治が横行し、人々に自由はなかった。そういう意味では、アメリカは、やはり少なくとも別天地であり、新世界であった。イギリスでは、チャールズ一世が君臨して、イギリス人はアメリカのアダムやイヴのように自由ではなかった。アメリカのアダムやイヴには階級制度もなかった。合理主義も、まだ、現代のように冷い理知万能ではなかった。19世紀になるとバイロンの Manfred のように、^⑧「悲しみが賢者を導き、理智が悲しみ」であり、^⑨「最もよく知るものが、知恵の樹は生命の樹ではないという fatal truth を歎かねばならない」ことを知ることになる。

新しいアメリカで——エマーソンの精神的独立によって——無垢のアダムとイヴは、イギリスとはっきりした決着をつけて、ますます、彼らの国を神に祝福された新世界、「約束の土地」と信ずるようになった。神も、自然も、人間のためのものであった。彼らの「約束の土地」は西に向って、大いなる運動を展開していった。先にふれた Westering movement 「西進運動」である。夢は無限に広がり、アダムとイヴの子孫も無限に増えていった。まさに、神話のアメリカである。

と同時に又、彼らはジェファソンやフランクリンに代表されるような、無垢なる、アダムとイヴの子孫であった。そして、ジェファソンの理想の国は自由で、自然のままの「農業的な国」であった。しかし、このジェファソンのアメリカはフランクリンから受け継いだアメリカでもあった。もっとも、フランク

リンも、かつては poor Richard ではあった。又、そして、この poor Richard は 'the way to wealth' を知っていた。故にフランクリンの楽園は、きわめて、リアルな、より産業主義的な匂いが強い楽園で、ジェファソンの楽園は、より牧歌的な匂いがするのも事実である。

理想主義的ジェファソンに対して、Alexander Hamilton という、きわめて現実的で強力な政敵がいた。アメリカの独立宣言において、ジェファソンは、フランクリンと共に、彼らの宣言文を書いた。彼の理念の根底には、ジョン・ロックの理念があった。「われわれは、すべての人は平等につくられ、創造主によって一定の奪いがたい権利を付与され、そのなかには生命、自由、および幸福の追求が含まれていることを、自明の真理であると信ずる。」とジェファソンは言い、ハミルトンはこれに抵抗した。

何はともあれ、ジェファソンらの独立宣言によって、新世界、もうひとつのエデンは、神以外のいかなるものにも抑圧されることのない完全な自由国家となった。しかし、これは又、いかなる国家、つまり、楽園ではない、政治的、現世的国家に対して、アメリカが、同様の国家であることの宣言でもあった。

こうして、アメリカは、いやおうなくエデンからも独立、決別することになった。しかし、まだ、「創造主によって」という言葉が、神の国であったことを示している。

上述のことは、つくられた神話とその崩壊を暗示している。暗示しているというよりもアメリカが、もうひとつのエデンであったということをはっきり示している。

このことは、現実の世界で、アダムとイヴの息子たちと、どういう関係になるか。これについては、まもなく、かの偉大なる Gatsby が説明してくれよう。

エデンは、見果てぬ夢としても、ジェファソンのような理想主義者に次の夢を託すことが出来るうちは、ジェファソンと共に生きられる。

一方、ハミルトンは中央集権的、産業主義的、勿論、資本主義的で、ことごとく、ジェファソンに対立する。そしてこの二人が、象徴的に以後のアメリカの政治の実態を示している。一方は重農政策を唱え、もう一方は重商政策を唱

える。しかし、ハミルトンの現実主義を無視出来ないのも、独立国家となった、かつての夢の国アメリカの現実でもあった。ヨーロッパからの「孤立政策」の標榜が強ければ強いほど、商業、工業の手を借りぬわけにはいかない。それは、かつて、清教徒が、神の国、エデンを機械の助けを借りて営まねばならなかったのと些々かの違いもない。

このジェファソンとハミルトンの対立は、人間の住む現実の葛藤であり、いずれも捨てるわけにはいかない。このことは、アメリカが、エデンでもカナンでも又、Arcadiaでもなかったし、これからも、ないことを示している。ジェファソンとハミルトンの違いはアメリカのほかの二大対立概念とも、密接につながって、遂には南・北の争いに発展し、この両者が一致することは、多分、永遠にないであろう。ここにも、アメリカの悲劇は象徴的に現われていると言える。

アメリカは、このようにして自らの歴史をつくり、辿ってゆくが、文学は、既にこのアメリカの「創成」そのものと深く関わっている。ただ、エマーソンやソロー、フランクリン、Crevecoeurを文学者と見なすか否かという問題はある。しかしこれらの人たちは、文学史にその地歩をしっかりと築いているし、少なくとも、アメリカの思想の導き手であったということには、何ら疑念をさしはさむ余地はない。

アメリカの文学は、今ふれた通り、アメリカの成立と深い関係があったが、誰の目にも本当にアメリカ人によるアメリカの風土を題材にしたアメリカの小説といわれ、認められる作品は、James Fenimore CooperのThe Leather Stocking Talesをまたねばならない。クーパーは、ヨーロッパもよく理解し、アメリカの内部矛盾、特にアメリカの民主主義、中でもJacksonian Democracyには、強い疑惑を抱いていた。ジャックソンはジェファソンの民主主義を引き継いだ第七代の大統領であり、ジェファソンは第三代であった。この間に、ジェファソンのいわゆる「ジェファソンの民主主義」といわれるものは資本主義に汚染されて胡散くさいものになっていることは歴史が証明している。このことにクーパーは、アメリカの民主主義の矛盾、民主主義を信じな

がらもその欠陥、その不合理性、民主主義そのものが内包している、葛藤に気づき、それらが、アメリカの将来に、暗い影を投じていることを The American Democrat で訴えた。つまり、クーパーはエマーソンのような、optimistic な楽園の信奉者にはなれず、ホーソンのように終生 pessimistic であった。そして、彼の Natty Bumppo は森に姿を消した。無気味なはがねの匂いの消えない文明に身を任せようとしているアメリカに怖れをなして、森の中に姿を消したのであった。然し、クーパーの森が意味している、無垢の自然は、ホーソンには、理解されない森であった。ホーソンにとって、「森」そのものも、悪魔に占領された、悪魔の砦であった。ホーソンは完全に悲観的である。或いは、クーパーの考えたような自然に、ホーソンは、一種の矛盾, egoism を感じとったのかも知れない。それにしても、クーパーは、彼の生きた時代では、毀誉褒貶相半ばする作家であった。むしろ、彼の真価は、彼の「アメリカの民主主義者」によって、実際以上に誤解されたのかも知れない。

クーパーは、その「革脚絆物語」という五部作によって、アメリカの文学を世界の文学に登場させた。というより、アメリカの文学が、イギリスやヨーロッパの文学とは、かなり異質の素材によって創られたアメリカ特有の小説であることを示した。この五部作はかなり膨大なもので、全部読むということは相当にむずかしい。主としたヒーローはナッティ・バムポーという。作品の出来た年代とナッティ・バムポーの生涯は一致していない。クーパーの自然に対する態度、とりくみ方、作家クーパーのヒーローに対する考え方などとの関係がある。ヒーローであるナッティ・バムポーに対する考え方は、つまり、彼の自然との関わり方を意味している。

クーパーの作品を理解しようと思えば、彼の生い立ちを理解しなければならない。これは、もう、はやらなくなったが、「新批評」の時代にはとんでもないことであった。小泉八雲は彼の英文学史で、⁽¹⁰⁾「バイロンは、絶体に、彼の生涯の悲劇を知らなければ、理解出来ない。」と言った。ある程度、ある作家を理解しようと思えば、その生涯についての知識は必要であろう。新批評の言うことに一理はあるとしても、作品の正しい理解に、作家の生い立ちが妨げになると

は思えない。

クーパーは、父 William Cooper (1754 - 1809) が 1780 年代にニューヨーク州の中部に広大な領地を獲得し、1789 年に荘園屋敷を建てて、クーパー一家は移り住んだ。父は Cooperstown という一大荘園の大地主で、大富豪であった。父は又、連邦党に属する豪気な政治家でもあり、クーパーは大切に育てられたが、父は 1809 年に政敵に倒された。クーパーが生れたのはワシントンが大統領に就任した年で、第三代の「ジェファソンの民主主義」のジェファソンから、第七代大統領のジャクソンがいわゆるジャクソンの民主主義をうちたてて、彼がその辣腕をふるっていた約 40 年の急激な歴史的推移のうちに作家として登場したのであった。その間、7 年間ヨーロッパに滞在し、帰ったのは、まさにジャクソンの民主主義のまただ中であつた。クーパー自身が、この歴史の移り変わりの中で、その影響をまぬがれるわけがなかつた。その事は前にもふれた、「アメリカの民主主義者」の中によくあらわれている。そして、ジャクソンの民主主義のもたらした様々な波紋は、アメリカの「夢」の挫折を決定的にし、アメリカの民主主義の根幹をゆるがすことにもなつた。

彼は「アメリカの民主主義者」を書く 10 年前に *Notions of the Americans Picked Up by a Travelling Bachelor* (1828) を書いた。これでは、クーパーは、極めてアメリカ的でアメリカの民主主義の礼讃者であつた。くわしくここでクーパーの生涯にふれるわけにはいかないが、彼はヨーロッパに行く前に *The Spy* や「革脚絆物語」のうちの *The Pioneers*, *The Last of the Mohicans* も書いて、ヨーロッパにもその名が知れわたっていた。更に *The Prairie* はヨーロッパ滞在中に書き進められてゆく。

故に、「革脚絆物語」の作品を書いている時代のクーパーは、複雑な社交関係が彼の背景にあり、又、自分の育つた環境の中の矛盾をも意識しながら、辺境の Wild West の魅力にとらわれた country gentleman であつた。もっとも、1822 年にはニューヨークに移つてはいる。しかし、「革脚絆物語」のヒーローは森の hunter であり trapper である。彼らは、ほかにも主人公はいるが、重要な主人公は未開の西部の象徴的人物であつた。ソローが憧れた西部そのものを象

徴するものであった。しかし、クーパーの西部では、先にふれたように、もう、あの清純さ purity はよごれ始めていた。つまり開拓された西部であった。開かれた西部は退屈な場所となり、その住民は賤しい民であった。それに対して、未開の西部は、冒険と友情の汚れのない世界であった。いかなる主人も持たない高貴な、無政府の民、無限の荒野の自由の民であった。これこそソローの理想とした世界であった。しかし、ナッティ・バムポーは、結局は森に姿を消した。「革脚絆物語」で、Natty Bumppo は名前が変わったり、死んだり、若がえったりしている。クーパーもたしかにアメリカの夢をみていたというべきであろう。しかし「スパイ」の 'Scout' という語は象徴的である。

クーパーの作品については、それが「革脚絆物語」のみであっても、語りつくせるものではなく、稿を改めねばならない。が、クーパーが、上の作品で語りたかったことは、その Leatherstocking に語らせている。しかし、ホーソンが「森」を恐れたのとは対照的に、クーパーは、森に無垢の西部をみていたことはたしかである。故にクーパーは、エマーソンの考えた、無垢のアメリカ的エデンの、アダムとイヴの子供であったと言えよう。しかし、もう一度、つけ加えるなら、「アメリカの夢」は破れかけていたのである。そして、クーパーは又、西部劇の多くの heroes のうみの親であった。

次に Nathaniel Hawthorne にうつろう。彼は 1804 年に運命的な家系に、といおうか、運命的な星の下にといおうか、ひとつの宿命を背負って Salem に生れた。父を早くに失い、9歳の時に足を怪我して2年間、家にこもって、読書に日々を過し、これが生涯孤独を愛する癖を彼に与えた。彼の母も又、孤独を愛した。

1692年から1693年のセーレムの witchcraft trial で、魔女を処刑した John Hathorne という先祖がいた。二代ほど前である。ついでながら、ホーソンという surname の綴りは、本来は、Hathorne である。父も Nathaniel Hathorne と綴った。最初の短篇の署名が Hawthorne である。

Hawthorne の作品を理解するには、アメリカの創成期の歴史の理解がなければならない。彼が生れたのは 1804 年の 7 月 4 日であった。彼の家は、ジョ

ン・ホーソンが魔女裁判で19人の魔女を処刑する判決を下したことでわかるようにニュー・イングランドの清教徒であった。清教徒主義といっても、プリマスのそれとマサチューセッツの清教徒主義とは、かなり性質が異っていて、前者は10年ほどにして後者にかくれてしまった。このことは先にふれた。カルヴィンの「予定説」と The Elect, God's Elect 「選民思想」のいわば、エリート意識が排他的、独善的な、本来の清教徒主義をゆがんだものにしたのであった。

ホーソンの文学は、このいわば歪んだピューリタニズム、特に異常なまでの「選民思想」の理解がなければ、何故、ホーソンは、これほどまでに、人間の罪を糾弾するのか、又、ホーソンは、どうして人間をそこまで、^{おと}賤しめるのかという疑いに答えが出て来ず、途中で抛り出してしまわないか。ホーソンは、こういう意味では、「アメリカ創生期」のもう一つの面を代表する作家であった。つまり、自然——無垢なるエデン——と文明、夢と挫折、全く無縁ではないにしても、そういう範疇からはみ出して、専ら、「罪」の問題、「原罪」意識にかかずらって一生を送ったのであった。

The Scarlet Letter の Hester Prynne は、この「原罪」にさいなまれ、いかに人のために、尽くそうと許されることなく、ほぼ7年ほど「緋文字」をつけている。もちろん、遂には、ヘスタープリンの「緋文字」をとろうという決議もなされるが、ヘスターは頑固に拒む。ヘスターが普通の女性であったら、狂ったか、自殺したかであった、苦難の道を、無事、くぐり抜けたのは、彼女の強靱な精神力、これは、ある意味で、E. A. Poe のいうところの人間の Perverseness でもあろうし、理知主義を通して、浪漫主義に至った人間の特性でもある近代的「我」の姿でもある。が、もちろん同時に、それは、Dimmesdale 牧師へのひたむきな愛であった。そして Pearl という、絶えず、ヘスターを監視し、非難する娘は、乖離した自我のつめたさであり、とりもなおさず、それも perverseness であった。

話しの筋を追うのは措くとして、この作品の読み方は、かなり複雑である。ホーソンは、自分をも、閉じこめた牢獄、それは「原罪」と「予定説」にかん

じがらめにされた、「清教徒主義」であるが、それに対する批判、つまりそういう社会、政治・宗教、それぞれを代表する人達が「緋文字」には出ているが、そういった、自分の先祖が過ちを犯さざるを得なかった社会、神権政治の社会に対する、痛烈な非難のように読みとれる。「批判」というより、ディムズデールのように過ちを犯して、くるしみ抜く弱い人間の極めて感情的な「呪詛」のようにも読めるのである。ディムズデールの終末への過程は傷しい。

娘のパールが存在も興味をひく。彼女は、「緋文字」と共にヘスターを死なさないためのものだと作者は書いているが、先にふれたように、これはやはり、ヘスターの単に子供というにとどまらない。近代文学が、その宿命とする「強情」な ego, それも、乖離した、自己破壊的 ego — self-destructive ego — スタンダールや、バイロンが悩んだ「我」の姿であったように読める。

Roger Chillingworth というヘスターの夫がいるが、これに、人間のもっとも醜い面を代表させている。ディムズデールの性格も、己れを語るように綿密に描写されているが、このチリングワースは、更に手がこんでいる。酷く醜いが、この男の苦しみも、又、理解出来る。誰もが、こういう境遇におちいったならば、なるであろうようなそんな醜さであり、ヘスターが、ディムズデールを弁護する時のチリングワースはまさに悪鬼である。これは、やはり、あの「予定説」の証明のようである。「予定説」ということから、チリングワースとヘスターとの間も、まさに「御心のまま」に従ってあのようになった。

チリングワースの復讐を完全に果そうとする堅い意図を知って、ヘスターは、ディムズデールを森の中で待つ。「緋文字」では、この森もやはり不吉な象徴である。彼女は、チリングワースが、ディムズデールに復讐をしようとしていることを告げる。チリングワースの周到な計略に、すっかり騙されていたディムズデールは、驚愕しながらもヘスターの誘惑に次第に新しい夢をみ始める。しかし、始めは⁽¹¹⁾「私の魂は滅びたが、他人の魂のために出来るだけのことはしたい。不実な見張りがいても、どうしても自分の陣をしりぞかない」というディムズデールはバイロンの Manfred が、⁽¹²⁾「わたしは人間にも神にも調停してもらいません。最後までわたしは、わたしです」と言うのに似ている。

ディムズデールをそそのかして、新しい世界で三人で暮そうというヘスターはマクベス夫人に似ている。そして、遂に、ディムズデールは、⁽¹³⁾「何故死刑囚の死刑執行以前にゆるされる慰めを私がつかんでいけないか」としばしの夢をみる。そして、ヘスターも自ら、その「緋文字」を捨てる。そうすると枯れた女になっていたヘスターは甦り、水々しい美しい女に戻る。しかし、投げた緋文字は、川の向うにも、川の中にも落ちず手前にある。ヘスターはある種の予兆を感じながらも、パールを呼ぶ。しかし、脅えたようにパールは近づいて来ない。ヘスターは、又、例の「緋文字」をつける。そこで、パールは彼女のところへは戻ったが、ディムズデールには近寄ろうとしない。母親に叱られて、ようやくディムズデールに近寄る。自分の父親に口づけをされるや、急いで川の水で洗う。ここで、パールが、ディムズデールを寄せつけないのは、母を男にとられたというような単純なものではない。悪は悪、罪は罪なりに、真実でないものを拒否するという浪漫主義の思潮がここにはある。

ディムズデールは、最後は、お祭りの日に説教をして、大衆の前で己れの罪を告白してヘスターや、パールの前で果てる。パールもそういう父は許す。しかし、ヘスターは、やはり最後まで、「緋文字」の女であった。しかし、この小説、いや、ロマンスの結果は、悲劇ではない。ちょうど、バイロンのマンフレッドの最後が、ゲーテのファウストの結末と違うように違っている。マンフレッドは、悪魔にも神にも魂を渡さずに、僧院長が、⁽¹⁴⁾「考えるも恐ろしいところ」に行ってしまった。ファウストは、神の許しを得て、昇天した。

しかし又、ホーソンは、⁽¹⁵⁾「人間はみんな同じく罪人である。」としめくっている。

ほかにまだ、ホーソンの作品は興味ある、又、象徴的な作品、The Birth Mark, Young Goodman Brown とか The Minister's Black Veil とか数多い。次回にふれたい。

断り：この原稿は、何年か前、文芸講演で行ったものに手を加えたものである。

アメリカ文学覚え書き(1)

註：1

- (1) Poor, poor dear Cat. And this was the price you paid for sleeping together. This was the end of the trap. This was what people got for loving each other.

Chapt XLI : A Farewell to Arms

- (2) A continent ages quickly once we come. The natives live in harmony with it. But the foreigner destroys, cuts down the trees, drains the water, When he quits using beasts and uses machines the earth defeats him quickly. The machine can't reproduce, nor does it fertilize the soil and it eats what he can not raise. . . . Our people went to America because that was the place to go then. It had been a good country and we had made a mess of it and I would go, now, somewhere else as we had always had the right to go somewhere else and we had always gone.

Chapt Two : Green Hills of Africa

- (3) Through thrice a thousand generations! never
Shall men love the remembrance of the man
Who sow'd the seed of evil and mankind
In the same hour!

. . . . They plucked the tree of science
And sin and, not content with their own sorrow,

Act I. Cain

- (4) If I shrink not from these, the fire-arm'd angels.

Ibid

- (5) 「歴史的覚え書き」の中でエマーソンが語っている

- (6) 「自然」の序.

ラルフ. W. エマーソン

- (7) 「散歩」

ヘンリー D. ソロー

- (8), (9) But grief should be the instrument of the wise ;
Sorrow is knowledge ; they who know the most
Must mourn the deepest o'er the fatal truth.

— Manfred —

- (10) Byron

(英文) 小泉八雲「英文学史」

- (11) . . . "I am powerless to go. Wretched and sinful as I am, I have had no other thought than to drag on my earthly existence in the sphere where Providence hath placed me. Lost as my own soul is, I would still do what I may for other human souls! I dare not quit my spot, . . .

The Pastor and His Parishioner

— The Scarlet Letter —

- (12) I hear thee, This is my reply : whate'er
I may have been, or am, doth rest between
Heaven and myself. — I shall not choose a mortal
To be my mediator.

Act III Scene I

— Manfred —

Spirit. Mortal! thine hour is come — Away! I say.

Man. I knew, and know my hour is come, but not To render
up my soul to such as thee :

Away! I'll die as I have lived — alone.

Act III Scene IV

— Manfred —

- (13) , — wherefore should I not snatch the solace allowed to the condemned culprit before his execution?

A Flood of Sunshine

— The Scarlet Letter —

- (14) He's gone — his soul hath ta'en its earthless flight —
Whither? I dread to think — but he is gone.

Act III Scene IV

— Manfred —

- (15) . . . After exhausting life in his efforts for mankind's spiritual good, he had made the manner of his death a parable, in order to impress on his admirers the mighty and mournful lesson, that, in the view of Infinite Purity, we are sinners all alike.

歴史的事象（言及の順による）

註：2

1. The Mayflower : 1620年12月16日最初の Puritans 102名を Plymouth に運んだ船。
2. Pilgrim Fathers : The Mayfle で12月16日に着いた人たち。Puritans のなかでも、彼らは separatists (分離派)であった。1630年に Massachusettes の Boston に来た人たちは Congregationalists (会衆派)であった。
3. The Mayflower Compact : 1620年12月16日に最初の puritans が上陸する前に船上で交わした契約、彼らは、彼らの自由を行使するために、「政治団体」を結成し「正当で公平な法律」に「当然の服従と忠順」を誓った。
4. Bible Nations : The Bible を生活の基礎とする人たちで、必ずしも英語国民だけではない。
5. Promised Land : 「約束の土地」 Promised Land 又は Land of Promise と書いたりする。マサチューセッツの清教徒の社会は、神権政治 (Theocracy) で、彼らの神学は「契約神学」であった。彼らの土地は、神との契約によって、彼らに恵まれたものであると考えた。
6. もう1つの楽園 : -Another Eden- バイブル国民は、アダムとイヴが「楽園」を追放されて以来、もう一度楽園に戻りたいと考えた。プラトンのポリティアも、トマス・モアのユートピアも、J. Milton の Paradise Regained も、その時代背景の中で楽園志向がある。もっとも、プラトンや、トマス・モアの「理想郷」は相当に政治的、社会改革的である。
7. 創生期 (Genesis) : 聖書のうちで、旧約の最初の部分、この世のはじまり、人類のはじまり、罪悪・救いのはじまりがのべられている。
8. Determinism : 「予定説」John Calvin (1509 - 1564) -フランス生まれの宗教改革者-の信条で、人間の救いは神によって定め

られているという。

9. The Elect : 「選民」前記のカルヴィンの「予定説」に関わるもので、救済される人間は、予め、神によって、選ばれ、決められているという考えから、「選ばれた人々」という意味。
10. Pragmatism : 「実利主義」 Benjamin Franklin や、 R. W. Emerson らの考えから発達し、 William James (1842 - 1910) - 米国の心理学者・哲学者 - が完成させた、アメリカ的哲学。
11. 清教徒主義 : Puritanism, アメリカに渡って来た Pilgrim Fathers を始めとする人たちの抱いていた思想で、イギリスの Church of England 「英国国教会」を purify しようとする考えから来た信条で、考え方は、いくつかに分かれる。
12. Congregationalism : 清教徒主義（ピューリタニズム）の一つの派で「分離派」に対して「会衆派」という。初めにプリマスに渡って来た 102 名は分離派で (Separatists) あった。1630 年にマサチューセッツにやって来たピューリタンはこの会衆派の人たちで、ピリグリム・ファザーズとは、質的にかなり違っていた。初期の 102 人は、10 年の間に名のみ残して、吸収された。がアメリカの創設のピューリタンとして、その「メイフラワー契約」と共に歴史に名をとどめた。この会衆派の人々は、その選ばれた指導者 John Winthrop を始め大部分が裕福な中産階級の農民、商人、職人たちで、ケンブリッジ出身が多く、新しい国で「神権政治」を行うというしっかりした計画をもって渡って来た。学殖豊かな牧師が多く、彼らが政治・宗教を牛耳った。
13. congregationalists : 会衆派の人々。
14. theocracy : 「神権政治」、John Winthrop を始めとする会衆派の人々がマサチューセッツに神の国を建て、理想的な政治、神との契約に基づいた「神」絶体の国を実現しよう

アメリカ文学覚え書き(1)

とした。プリマスのピルグリムは個人的な自覚を尊び、自由と平等を唱え、民主主義的な「清教徒」であったのに対して、ウインスロップらは、強烈な正義感があったが、身分的差別を厳守し、神への絶体服従を誓い、福音主義に基づいていた。小数、独裁の政治が行われるようになるのは当然であった。

15. Hartford : マサチューセッツ、ボストンの独裁的神権政治に、つまり、ウインスロップのやり方に反対した人々に Thomas Hooker と Roger Williams がいた。フッカーは非常に民主的な考え方をする人で、マサチューセッツには我慢出来ずハートフォードに逃げ、そこに彼の町を建てた。ここはのちの自由主義政治思想の発祥の地となった。
16. Providence : Roger Williams はフッカーよりももっと激しい思想の人で、すべての宗派を認めず、個々の人間と神との直接交渉を重んじた。教会と国家についての自由、インディアンにも自由、人権を認めよと主張したために危険人物と目され、教会におられなくなった。インディアンの酋長の力によって Rhode Island に土地を見つけ、植民地をつくって、Providence と名づけた。
17. Harvard : マサチューセッツにジョン・ウインスロップらが植民地の聖職者を養成するための教育機関をつくった。これが、現在のハーヴァード大学である。ボストンの対岸のケムブリッジにある。
18. 啓蒙主義 : Renaissance の humanism, 人間の理知, 経験中心の考え方で、合理的, 批判的に萬物をみようとする傾向をもつ。ニュートンの引力の発見, ロックの政治哲学, デカルト, スピノーザといった人たちの, 懐疑主義, 経験主義, 主知主義などが、自然界だけでなく、人間社会も一切の偏見的先入観から独立して、永久普遍的合理性をもって律すべきであるとする思想。一切を合理的な理性によって批判し、世の蒙を啓いて、新しい秩序をたてよ

うとする考え方である。宗教も又、この批判に堪えねばならないことになる。

19. Renaissance :

ルネサンスは読んで字の如く「再生・復興」の意味である。中世において、神の影にかくれて、その本来の意味が無視されて、形骸のみが生きていた古典に光が与えられるようになって、人心が目覚め、古典の刺戟を受け、新しい文化を創造し、人類文化に新しい一時期をもたらした文化運動である。近世はまさにこのルネサンスから始まるのである。

20. The Great Awakening : 啓蒙主義、合理主義の波に遂に宗教も「理神論」という

矛盾を包含することとなり、 Puritanism も人心から急速に衰え始め、これを食い止めようとして、 Jonathan Edwards が起こした運動。エドワーズの説教は人間の罪の糾弾は峻厳で神の怒りは激しく、この時代を考えれば、むしろ逆効果で、反発をかい、遂に奥地に逃げざるを得なくなった。

21. Marx と Marxism :

Kar Marx (1818 - 1883) ドイツの経済学者、科学的社会主義を創出した人。彼の理論は唯物論で、これは、人間を歴史的存在とみなし、歴史の発展を経済的基礎におく。つまり、社会生活は物質的生産力であり人間社会は生産関係によって成り立つということであるが、彼はこれを私有財産の否定、社会の財産、つまり、共同の財産というように資本財産の帰属を移すことによって人間の社会は平等・平和になると考えた。

22. Canaan :

パレスチナ地方の古い名称、旧約聖書ではヤーベ (Yahweh 又は Yahveh と綴る、又 Jehovah と書く) がイスラエル民族に約束した「乳と蜜との流れる地」で、楽園のことである。そして、イスラエルの民は Moses (モーゼ) に引きいられて約束の土地をみても、モーゼには、その時、もうそこに入る特権はなかった。極めて、象徴的である。

23. Brook Farm : 正式には Brook Farm Institute of Agriculture and Education といって, George Ripley (1802 - 80) を指導者してボストンの9マイル南の West Roxbury に発足した「社会主義的実験場」であった。「超絶主義者たち」のやった事業の一つで, 目的は「知的労働」と「肉体労働」の自然な結合, つまり, エマソンの言った, 「理論」と「行動」の一致, The American Scholar (アメリカの学者) でエマソンが言っているのをリプリが実践した。実際にこの「新しい村」に入ったのは Nathaniel Hawthorne, Charles Anderson Dana と John Sullivan Dwight で, ほかは通って来た。Brook Farm は 1841 年 4 月に発足して 1847 年 10 月いろいろな理由で解散した。D. H. Lawrence も, このような「新しい村」を考えた。日本でも武者小路らが実験した。
24. Wineland, Vinland : サムエル・モリソンの「アメリカの歴史」の先史時代を扱った部分に出てくる。アイスランドのサーガ(北歐中世の散文による英雄の伝説)で赤毛のエリックがグリーンランドを発見し, その息子のレイフが AD 1000 年に, ノルウエーを訪れ, オラーク王(963? - 1000)に, グリーンランドにキリスト教を伝えるように頼まれ, グリーンランドに向かったが嵐でヴァインランドに着いたとある。なおこのことはビアードの「アメリカ合衆国史」にもものっている。「ぶどうの国」。
25. 理想郷, Utopia : 古くはギリシアのプラトン, イギリスでは Thomas More (1478 - 1534) の作品である。これがアメリカを Utopia と考える下地になるのに役立った。人間は, 常に理想を求めるが, バイブル国民には, いつもプロトタイプとしてエデンがあるからなお更である。ビアードは, アメリカの次にいく先は「宇宙」だと言っていた。
26. Jeffersonian Democracy : Thomas Jefferson (1743 - 1826) 第三代大統領 (1801 - 09) ヴァージニア西部の小農民の出身。独立戦争に参加し

た。フランクリンと独立宣言文を起草した。商業より農業を重視し、人間の平等、平和を政治の使命と考えて、民主党をつくった、現実的な Hamilton と、ことごとに対立した。第七代のジャクソンの民主主義と比較される、理想主義の濃い民主主義。

27. Yankeeism :

北アメリカ人を総称してヤンキーと言うがヤンキーの心を表わしてヤンキーイズムと言う。ヤンキーイズムの下地はもちろんピューリタニズムである。ピューリタンの理想は「神の国」「約束の土地」ユートピア、カナン「もう一つのエデン」の創出であったが、彼らの「約束の土地」では機械が、彼らの生存を支配した。この機械との妥協が産業主義となった。

これがつまりヤンキーイズムである。産業万能主義でもある。ここにアメリカの一大皮肉をみる。又この産業主義はアメリカ的楽天主義をも意味する。

28. Philadelphia :

マサチューセッツで起こって力を増した産業主義はフランクリンの町フィラデルフィアに移る。当時のフィラデルフィアはアメリカを代表する港湾都市であった。フランクリンと共に生まれ、育った町であるということで特別、意味がある。

29. Pandora とパンドーラー : ギリシア神話。パンドーラーは、地上初の女。プロメーテウスの
の 函

テウスが天から火を盗んだのを怒った神が復讐のために泥から創らせた、神の如くに美しく優雅で、魅力的なうえに、手芸にすぐれた女であった。プロメーテウスの弟エピメーテウスは、神々からの贈物を受けとってはいけないという兄の忠告を忘れて、このパンドーラーを妻とした。彼女は天上から禍を閉じこめてある壺を持って来ていたが、地上につくや、好奇心から、この壺を開けた。すると希望のほかの禍が地上に出た。

30. Salem と魔女裁判 :

セイレムはマサチューセッツの港町で、ホーソンの生まれたところである。ホーソンは17世紀以来のピューリ

アメリカ文学覚え書き(1)

タンの名家の出身で、以前は一般に魔女の存在が信じられていた。ホーソンの「緋文字」を読むとよくわかる。この魔女を捉えて裁判にかけて、処刑した人がホーソンの祖先にいた。John Hathorne という人である。

31. Monroe Doctrine : 1823年12月、第五代大統領、James Monroe が、アメリカはそれまでもヨーロッパに不干渉政策をとって来たが、アメリカは政治組織もヨーロッパとは異なっているので、ヨーロッパ諸国がその組織を拡大してアメリカに及ぶのは危険であると宣言し、アメリカもヨーロッパに干渉せず、ヨーロッパ諸国も又、干渉すべきでないとして、アメリカの「孤立政策」を内外に示した。これはアメリカの国家成立の基本理念であって第1次大戦まで続く。
32. 勝利なき終結 : アメリカの孤立政策にも拘らず、遂に第1次大戦に自衛上参加せざるを得なくなった。時の大統領 Woodrow Wilson は、議会で、あとに問題をのこさぬように、「勝利なき終結」と言った。
33. Westering Movement : アメリカの開拓が西に向かって怒濤のように動き初めて (西進運動) 1890年まで続く。この運動を西進運動という。スタインベックの The Leader of the People にこの運動の終結によって、アメリカ人の夢が喪失したことを嘆く老人が出ています。
34. 独立宣言文 : 1775年7月2日、フィラデルフィアで第2回の大陸会議は独立を可決した。一方、6月にはトマス・ジェファソン、ジョン・アダムズ、ベンジャミン・フランクリンらを含む5人の独立宣言文起草委員会がつくられて、草案を練っていた。この草案はまずジェファソンによって書かれ、他の委員が数カ所修正して7月4日、大陸会議によって正式に採択された。ピアードの「アメリカ合衆国史」にくわしい。
35. Arcadia (Arkadia) : ギリシア、ペロポネソス半島の中央部地域、古来山国と

して知られ歴史的にも特殊な地域で、住民は牧羊、狩猟を生業として一種のユートピアであった。

36. Jacksonian Democracy : ジャクソンの民主主義は理想主義的なジェファソンの民主主義とは、かなり質を異にしている。産業主義的、資本主義的になり、農本主義、平等主義は失われている。多分に独裁的である。
37. Cooperstown : James Fenimore Cooper の父, William Cooper (1754 - 1809) の開拓した土地で、今日もその名はそのまま残っている。
38. ego : ルネッサンスによって人間は神から解放されて、様々なものを得たが、最も大きなものは解放された「我」であった。この「我」の解放は又、自由主義、個人主義による近世文化の原動力となったが、同時にその崩壊の原因にもなった。
- 浪漫主義における我 ego はその典型であった。又、近代文学にさまざまなテーマを与えることにもなった。自己破壊的「我」を現代文学にみい出すことは容易である。

作品（言及の順による）

- | | |
|------------------------------------------|-----------------|
| 1. A Farewell to Arms (1929) : | E. Hemingway |
| 2. Cain (1821) : | G. G. Byron |
| 3. Paradise Regained (1671) : | J, ミルトン (作品名のみ) |
| 4. Green Hills of Africa (1935) : | E. Hemingway |
| 5. Walden, or Life in the Woods (1854) : | H. D. ソロー |
| 6. ユートピア (1516) : | トマス・モア |
| 7. ポリテイア (理想国) 383 B. C. : | プラトン |
| 8. 歴史的覚え書 : | ラルフ・ウォルドー・エマソン |
| 9. 自然論 : | " |
| 10. アメリカの学者 : | " |

アメリカ文学覚え書き(1)

- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 11. 神学部講演： | 以上 8 - 11 はアメリカ古典文庫 17 超越主義 |
| 12. 富への道： | ベンジャミン・フランクリン，アメリカ古典文庫 1 フランクリン |
| 13. 散歩： | H. D. ソロー，アメリカ古典文庫 4 |
| 14. Manfred (1817)： | G. G. Byron |
| 15. The Prairie (1827)： | J. F. Cooper |
| 16. 偉大なるギャッピー： | F. S. フィッツジェラルド著，野崎 孝訳 |
| 17. The Great Gatsby (1925)： | F. S. Fitzgerald |
| 18. アメリカの民主主義者： | J. F. クーパーアメリカ古典文庫 3，J. F. クーパー |
| 19. アメリカ人観： | 〃 |
| 20. The Spy (1821)： | J. F. Cooper |
| 21. The Pioneers (1823)： | 〃 |
| 22. The Last of the Mohicans (1826)： | 〃 |
| 23. The Scarlet Letter (1850)： | N. Hawthorne |
| 24. 緋文字： | ホーソン作，佐藤 清訳 |

参考文献

歴史

- アメリカの歴史(1)(2)：サムエル・モリソン
- アメリカ合衆国史：ビアード

文学史

- 総説アメリカ文学史：大橋健三郎・斉藤 光・大橋吉之輔編
- 概説アメリカ文学史：横沢 四郎・阿部 宏・阿野文朗・佐々木肇・浜野成生
- 英文学史：小泉八雲
- 要説アメリカ文学史：佐藤順夫
- アメリカの姿：ノーマン・フォスター著，待鳥又喜訳

その他

- ヴァージンランド：H. N. スミス，永原 誠訳

- ユートピアとアメリカ文学： 濱田政二郎
- アメリカのアダムー 19世紀における 無垢と悲劇と伝統ー： R. W. ルイス著, 齊藤 光訳
- エデンの探求： 元田脩一著
 - ーアメリカ小説の一特質ー
- アメリカの神話と現実： 大井浩二著
 - ーパリンソン再考ー
- アメリカ文学作家シリーズ第5巻： ミネソタ大学編, 日本アメリカ文学会監修
- 新世界のユートピア： 増田義郎著
- アメリカ古典文庫：
 1. フランクリン 2. クレヴクール
 3. J. F. クーパー 4. H. D. ソロー
 15. ピューリタニズム 17. 超越主義
- プラトンー人と思想ー： 中野幸次
- ユートピア： トマス・モア著, 平井正穂訳